

児童期の発達課題についての教育心理学的考察 (IV) —大学教員が兼務した附属小学校校長からの提言—

假屋園昭彦¹

(2023年 11月 15日 受理)

An Educational Psychology Study of Developmental Tasks in Childhood: The Perspective of
the Principal of an Elementary School Attached to Kagoshima University (IV)

KARIYAZONO Akihiko

要約

筆者は現在、鹿児島大学大学院教育学研究科の教員（教授）である。また平成29年度（2017年度）から令和4年度（2022年度）まで鹿児島大学教育学部附属小学校校長を兼務した。筆者の研究者としての専門分野は教育心理学および道徳教育である。本稿は筆者が研究者の立場から、同時に校園長の立場から附属小学校および附属幼稚園で行った職員会議、委員会、文集での指導助言と原稿を整理した内容である。これらの内容は、先生方、児童生徒、そして保護者に考えてもらいたいメッセージである。それぞれのメッセージは、心理学、哲学、倫理学の理論を学校教育に当てはめて考察した内容になっている。

キーワード：目標と行動、行動と心、自分らしさ、感性、身体感覚、モラル・コンパス

問題と目的

I. はじめに

筆者は、鹿児島大学大学院教育学研究科の教員（教授）であり、同時に平成29年4月（2017年4月）から令和5年3月（2023年3月）までの6年間、鹿児島大学教育学部附属小学校校長および鹿児島大学教育学部附属幼稚園園長を兼務した。本稿は校長および園長として附属小学校、附属幼稚園で行った式辞、講演、職員会議、各種委員会での指導助言および文集の原稿をまとめた内容である。これらの内容は、教育心理学および道徳教育を専門とする研究者が、附属小学校、附属幼稚園での経験をもとに考察したテーマであり、同時に児童および職員の方々へ送ったメッセージ

¹ 鹿児島大学法文教育学域 教育学系 教授

である。

それぞれのメッセージで土台になっているのは、心理学、哲学、倫理学の理論である。これらの理論に筆者の考えを加えながら、研究者および校園長の立場として、教師、児童、保護者に考えてもらいたい内容、そして伝えたい内容を指導助言および原稿として作成した。

本稿の構成を以下に示す。

- II. 附属小学校令和4年度卒業式式辞
- III. 附属小学校令和4年度半成人式講話
- IV. 附属幼稚園文集「ふれあいノート」原稿
- V. 附属幼稚園文集「ぶらんこ」原稿
- VI. 附属小学校 始業式 (対児童向け)
- VII. 附属小学校指導助言 (対職員向け)

II. 附属小学校令和4年度卒業式式辞 令和5年(2023年3月17日)

主題：自分らしさ、個性、学ぶことの意味

本日、鹿児島大学教育学部附属小学校令和4年度第72回卒業式を挙行できますことを心から嬉しく思います。そして只今、卒業生138名に卒業証書を授与いたしました。卒業生の皆さん、ご卒業、おめでとうございます。保護者の皆さまにおかれましては、お子様のご卒業を心からお喜び申し上げます。同時に、6年間にわたる献身的なPTA活動に心から感謝申し上げます。また本日は、来賓の皆様のご臨席に深く感謝申し上げます。

今日は卒業生の皆さんに二つの話をいたします。一つ目は自分らしさの話です。二つ目は学ぶことの意味についての話です。

最初に自分らしさの話です。自分らしさは個性とも言います。自分らしさについて、皆さんは道徳の授業のなかでたくさん考えてきました。

自分らしさ、個性という皆さんは「特技や人にできないことができる」といったイメージをもつかもしれませんね。

実は個性には種類があるということを知っていますか。個性の種類を紹介しましょう。自分にあてはめて考えてください。個性には「目立つ個性」と「目立たない個性」があります。

スポーツや音楽、図画工作などで優秀な成績を上げると、とても目立ちます。また勉強でもよい点数をとると目立ちます。これらは目立つ個性と言えます。個性というと、どうしても目立つ個性ばかりを考えてしまいがちになります。

一方で目立たない個性があります。人の話をしっかり聞くことができる。いつも気持ちが落ち着いている。自分がやるべきことにしっかり取り組むことができる。一つのことを地道に続けることができる。これらもりっぱな個性です。

目立つ個性ばかりではなく目立たない個性も考えてみると、今まで気づかなかった自分のよいと

ころが見つかります。

次に個性には出発点としての個性と到達点としての個性があります。出発点としての個性は、もともと自分がもっている興味や関心、特技のことです。生まれつき走るのが速い、歌がうまい、絵が上手、といった特技は出発点としての個性と言えるでしょう。

一方で到達点としての個性とは、学びを通して習得した自分らしさのことです。「自分の個性が何かすらわからない状態」から始まり、とにかく目の前にあるやらなければならない仕事や、学ばなければならない事柄に、その都度その都度、取り組み続けた。その結果、振り返ってみた時にできているという個性があります。

このように個性には種類があります。最初から人と違うこと、自分にしかできないことをやろうとする必要はありません。みんなと同じこと、平凡なことにしっかり取り組むことです。

そのなかで自分なりの工夫をしてください。それが個性になります。個性とは、「何をやるか」ではなく「いかにやるか」に現れます。

例えば掃除の時間がありますね。みんなは同じことをしています。しかし「漫然と取り組むか工夫しながら取り組むか」という「いかにやるか」は人によって違います。ゴミがたまりやすいところや、掃除を忘れやすいところを考えながら取り組むことができるかどうか「いかにやるか」になります。

したがって自分らしさや個性を作ろうとあせる必要はありません。まず誰にでもできること、みんなと同じことにしっかり取り組みましょう。そしてその中でどんな工夫ができるかを考えましょう。それが自分らしさに育っていきます。

次に学ぶことの意味の話です。皆さんはこれからも学びが続きます。「学びは私達に何をもたらしてくれるか」を紹介します。

皆さんは教科書の内容を知識として学びます。では教科書には何が書いてあるかを考えましょう。教科書には、過去に起こった出来事と世の中や自然のしくみが整理されて書かれています。これらを私たちは知識として学びます。

ここで重要なことは、過去に起こった出来事は将来も起こりうるということです。このことから「知識は私達に何をもたらしてくれるか」を考えます。

第一に、知識によって将来を予測することができるようになります。第二に、予測できるようになれば、どのように行動すればよいかという計画を立てることができるようになります。第三に、私達の行動がこれで正しいかどうか、という行動の妥当性がわかります。

知識を身に付けることによって、予測を立て、計画を立てることができる。そして自分の行動が正しいかがわかります。これが自分の判断で動くことができるということです。自分の判断で動くことができはじめて私達は、自由になることができます。自分で判断できずに、人の指示をもらわなければ動けないということはとても不自由です。

学びを通して知識を身に付けることによってはじめて私達は、自分で判断することができるよう

になります。そしてこれが自由です。学びを通して私達は自由になることができます。

18世紀に活躍したカント（1755）というドイツの有名な哲学者がいます。カントの考えを紹介します。人からの指示をもらうことはとても気楽である。一方で、自分の判断で動くことはとても厳しいことである。学ぶということは、自分の判断で動く力を身に付けるということだ。そしてこれが成長するということだ。以上がカントの考えです。皆さんがこれからの学びをとおして成長していくことを期待しています。

令和5年3月17日 鹿児島大学教育学部附属小学校 校長 假屋園昭彦

III. 令和4年（2022年）11月29日 附属小学校令和4年度半成人式講演

主題：目標の種類について

半成人式、おめでとうございます。今日に向けて皆さんは自分の将来について考えてきました。そこで今日は、目標についての話をいたします。目標にはいろいろな種類があることを知っていますか。目標の種類を考えてみましょう。

【 目標の種類 】

1. 「大きな目標」と「小さな目標」

目標には「大きな目標」だけではなく「小さな目標」があります。今日、みなさんが発表してくれた将来の仕事は「大きな目標」になります。

「小さな目標」の達成を積み重ねていくと「大きな目標」に辿り着きます。例えば積み木で高いタワーを作る場面をイメージしましょう。高いタワーが大きな目標です。一つひとつの積み木が小さな目標です。この一つひとつの積み木を重ねると高いタワーという大きな目標に辿り着きます。

「小さな目標」とは「今、自分にできること」そして「短い期間で達成できる」目標です。目標を立てるときには、「大きな目標」と一緒に「小さな目標」を立てましょう。そして「今、自分にできること」から始めましょう。

2. 「行動を始めるときに見える目標」と「行動を始めるときには見えていないけれど、やっていくうちにだんだん見えてくる目標」

...(1) 行動を始めるときに見える目標

この目標の特徴は、行動を始めるときに目標が見えているので、計画が立てやすく、行動しやすいという点にあります。例えば運動会や音楽発表会といった学校行事がこの目標になります。

...(2) 行動を始めるときには見えていないけれど、やっていくうちにだんだん見えてくる目標

長い名前の目標ですね。この目標は行動を始めるときには見えません。そこで、まずやらねばならない行動から先に始めます。すると行動を続けるうちに次第に、今まで見えなかった具体的な目標が見えてくるのです。不思議ですね。

例えば掃除（そうじ）をしなければならぬとします。まず掃除という行動を始めます。この時点では具体的な目標は見えないかもしれません。しかし掃除を続けるうちに、『ぞうきん』や『ほうき』はどう使えばよいか「掃除を忘（わすれ）やすい場所はどこか」「ゴミがたまりやすい場所はどこか」といった掃除を行うときの具体的な目標が見えてくるのです。

この目標は、実際に行動を始めないと見えません。したがって行動を始めるときに「目標が見える、見えない」にこだわる必要はありません。まずやるべき行動を始めましょう。具体的な目標は行動を続けるうちにだんだん見えてきます。

3. 「達成するための目標」と「続けていくための目標」

目標には「達成するための目標」と「続けていくための目標」があります。「続けていくための目標」の一つに「物事のよさ（価値）を考える目標」があります。この目標は一回答えを出して終わりではなく、皆さんが常に、そしていくつになっても「考え続けるための目標」です。

例えば皆さんが2年生や3年生のころ、コロナの影響で学校がお休みになりました。そのとき皆さんは「学校に通うよさって何だろう」「教室で先生や友達と一緒に勉強するよさって何だろう」といった「学校のよさ」を考えたことでしょう。

「物事のよさ（価値）を考える目標」は、今の自分の生活の意味を考えるために必要です。例えば「友達のよさって何だろう？」「家族のよさって何だろう？」「生きているよさって何だろう？」といった目標です。皆さんはこの目標を道徳の授業でたくさん考えてきました。これからは是非、考え続けてください。

4. 一つの時代が終わって、ふり返ったときにはじめて自分がやり遂げたことがわかる目標

「自分がやり遂げたことはこういうことだったのだ」ということが、一つの時代が終わって、ふり返ったときにはじめて見えてくる目標です。

この目標は行動を始めるときには見えません。行動を続けている間も見えません。例えば皆さんは4年生になって半年が過ぎました。この半年で自分がやり遂げたことは、今ならわかりますよね。

これらのことは4年生の4月には見えなかった目標ですし、途中でも見えなかった目標です。終わってはじめて見えてくる目標です。

来年の3月、4年生が終わる時に、4年生の時に自分がやり遂げたことがたくさん見えてくるでしょう。そして小学校を卒業する時にも、たくさん見えてくるでしょう。その時のために、今を頑張りましょう。

5. 「与えられる目標」と「自分で見つける目標」

与えてもらうだけの目標ではなく、自分で見つける目標があります。自分で見つける目標は、自分に合った目標になるのでやる気が出ます。

ぜひ自分だけの目標を見つけてください。

6. 児童のみなさんへ

このように目標はいろんな姿で皆さんの前に現れてきます。目標はいつも皆さんのすぐそばにあります。新しい目標を見つきたい時、今の自分にふさわしい目標がきっと見つかります。

そして今の自分にふさわしい目標は何かを考えながら、まずは行動してみましょう。

7. 保護者の皆様へ：目標と行動の関係

目標と行動の間には「目標が行動を育て、行動が目標を育てる」という、お互いに影響を与え合う関係があります。したがって、たとえ目標が見えなくなった状況に置かれたとしても、行動を始める時点で目標が見える、見えないにこだわる必要はありません。今、できることから行動を始めましょう。

これから先、目標を見失いそうになったとき、あるいは何を指したらよいかわからなくなり、目指す方向に迷った時には、この5種類の目標を思い出してください。

IV. 附属幼稚園「ふれあいノート」原稿

1. 平成29年度(2017年度)

主題：発達心理学から見た幼児期の特徴：這えば立て、立てば歩きの親心に注意

私は大学で心理学を専門としています。そこで発達心理学の立場から幼児期の発達の姿を素描してみましょう。これまで仕事で幼稚園での教育相談をたびたび担当してきました。そこで保護者から多く受ける相談は「うちの子は、同級生に比べてまだ〇〇ができない」というものです。

幼児期の発達には次のような特徴があります。幼児期の発達は坂道のように少しずつじわじわと「できなかったこと」が「できるようになる」のではありません。幼児期の発達は「階段」のイメージで、今まで「できなかった」ことが突然「できるようになる」ことが大きな特徴です。このように中間状態がない突然の変化をカタストロフィー現象と呼び、人間の行動や発達にはよく見られる現象です。したがって「できない」からといって過度に心配する必要はありません。スキップやケンケンパーも衣服の着脱も「できない、できない」と思っていたのが、ある日突然「あらっ、できるようになっている」のです。幼児期の発達は「階段」のイメージで「ためて、ためて、一気にはき出す」のが幼児期の発達の姿です。したがって、できないからといって焦る必要はありません。

次に注意点を述べておきます。わが子がいろんなことをできるようになると、親としてもうれしくなり、つい、次から次へとその先を要求してしまいます。「跳び箱が三段跳べた」。「じゃ、次は四段もいけるかも！」と次々に要求してしまいます。「這えば立て、立てば歩きの親心」とよく言います。何かが「単発で、できるようになる」と「いつでもどこでも、何度でも、できるようになる」ことは違います。「いつでもどこでも、何度でも、できるようになる」ことを熟達化と呼びます。

熟達化は階段の踊り場に相当します。発達には「できたり、できなかったりする時期」があります。ここが「ため込んでいる」時期になります。「ため込む時期」があつてこそ一気にはき出す時期がくるのです。子どもに「ため込む時期」を作らせず、親が子に次々に要求すると、発達のエネルギーを根こそぎ奪ってしまうこととなります。子どもには「ため込む」時期を作ってあげ、見守ってあげましょう。

見守り、待つことは楽ではありませんが、親も子と一緒に苦労しながら成長していきましょう。幼児期は発達の醍醐味を一番感じる事ができる時期です。

2. 平成30年度（2018年度）

主題：幼児期と児童期におけるテレビ視聴の注意点

大学では心理学を専門としています。昨年は幼児期全般の話をしましたので、今年は幼児期と児童期のテレビ視聴というテーマに絞って話をしてみます。

一般に「授乳や食事時の視聴はまずい、視聴のルール作りが必要」といった指摘はなされているのですが、実際には、①昼間、母親と乳幼児との二人だけの時間はストレスがたまる、②炊事、洗濯、掃除といった家事の際は、子の相手ができない、という問題が生じています。そこで「子に長時間テレビを見せることがよくないことはわかっているが、現実の生活スタイルからテレビを全く見せないことはむずかしい」という意見も多いのです。

そこで一般的には、テレビ視聴の際の注意点として以下の諸点が挙げられています。①なんとなくつける「ながら視聴」をやめる、②スイッチのオン、オフをこまめに行う、③テレビを幼児一人だけで見せることがよくないので、親子で一緒に対話しながら見る、④テレビと他の遊びとのバランスを考える。

映像の特徴を踏まえながら、こうした注意点が必要な理由について紹介しましょう。

第一にテレビ（映像）は情報過多であるという特徴があります。幼児の場合、頭の中で一度に情報を処理できる量はまだ少ないのです。そこで自分が一度に処理できる以上の情報が多量に入ってくると、脳が情報を遮断してしまいます。すると頭の中では何も情報を受け付けない状態になってしまい、映像を見ているようで、実はぼんやりとした状態のままであることとなります。この状態が常態化することがまずいのです。

第二にテレビ（映像）は、目の前の刺激（画面）が短時間（秒単位）で頻繁に変わり過ぎるので、新しい刺激（画面）が次々と目の中に飛び込んできます。テレビは視聴者を飽きさせないように意図的にそのような作り方をしています。短時間で頻繁に目の前の刺激が変わることを求める習性が身に付いてしまうと、物事をじっくりと考え、少ない刺激をもとに自分で想像をめぐらす、といった思考の働きが育ちません。

第三にテレビをはじめ映像情報は、感情に訴える力は強いのですが、問題の背景や本質を言葉で考える思考力を育てる力は弱いのです。すなわち映像は言葉を使って論理的に物事を考える力を育

成するには適していません。

以上と逆の性質をもつのが書物（絵本も含みます）です。書物は情報量が少ないために自分で想像したり、考えたりする比重が多くなるのです。テレビと本のバランスを考えるとよいと思います。

3. 令和元年度（2019年度）

主題：幼児期と児童期の子への叱り方について

大学では心理学を専門としています。今年は、幼児期と児童期の「叱り方」というテーマで話をしてみます。

わが子を叱る際の重要なポイントは「子の今だけを見ない」ということです。最終的にどんな人間に育ててほしいのかを考えます。すなわち長期的な視野をもつことが必要です。したがって、例えば「最終的にわが子には、自主的に考え、判断し、自発的に行動できる自立と自律ができた人間に育ててほしい」というのであれば、そのためにはどんな叱り方がよいのかを考えます。以下にポイントを紹介します。

第一に、親が一方的に怒鳴りつけたり、頭ごなしに否定してしまう叱り方はしないということです。このような叱り方をされると、子はその時点で思考停止になってしまいます。すると自分で考え、自分で判断する自律性の力が育ちにくくなります。

第二は、子に何を習得させるために叱るのか、という叱る目的を親が自覚しておくということです。子に特定の判断規準を習得してもらうことが叱る目的になります。そこで叱る時には、子に習得してもらいたい判断規準を示す必要があります。したがって「判断規準としての叱る理由」を子にわかるように説明する必要があります。

例えば特定の行為を禁止する場合でも、「してもよいこと、してはいけないこと」の判断規準を理由として示す必要があります。特定の行為を禁止する判断規準としては、(1) 自分に危険（自己危害の回避）、(2) 他人に危険（他者危害の回避）、(3) 他人の持ち物（他人の持ち物の尊重）、という分類が可能です。これらの判断規準を子に習得してもらうために叱ります。判断規準を示してもらえると、子は納得感を得ることができます。できるだけ頭ごなしの否定表現（例えば「ダメ」）を使わずに話す工夫をしてみましょう。例えば「手も洗わずダメじゃないの！」ではなく、「帰ってきたら、まず手を洗ってから遊ぼうね」というように「どうすればよいのか」という行動の順序を具体的に示してみます。

あくまでも行動の判断規準を習得してもらうということが叱る目的になります。

4. 令和2年度（2020年度）

主題：幼児期における感性の育み

大学では心理学を専門としています。今年度は心理学の立場から感性というテーマで話をしてみます。近年、学校教育においては学習活動のデジタル化が進んでいることは周知のとおりです。デ

デジタル教材の種類も増え、オンラインでの授業や、テレビ会議システムを使って遠隔地の児童同士がやりとりをすることも可能になりました。

このようなデジタル化への流れは、今後、私たちの生活や教育の中に浸透していくことでしょう。こうした傾向の中で改めて幼児教育の意義を以下に考えてみます。

デジタル機器を使用する場合、私たちはどのような身体機能を使っているでしょう。デジタル機器で学習する場合、私たちが使用する身体機能は視覚と聴覚のみです。いわゆる五感や肌で感じる機能はほとんど使うことがありません。こうした状態が発達の早期から続くと心身の諸機能のバランスを保つことができなくなると言えます。特に人間の心の機能の中核である想像力の育ちに影響します。

想像力の源は五感を土台とする身体感覚にあります。そしてこの身体感覚を育む取り組みが感性に働きかける教育になります。五感を刺激し、身体感覚に働きかけることによって実感を伴う想像力が育ちます。これが感性です。

幼児期は、人、もの、自然と直接触れ合うことができる時期です。そして「実際にやってみることが許される」時期です。こうした時期の経験によって、「痛み」「手触り」「寒暖」「行動の結果」を実感することができるのです。この経験によって実感に裏づけられた想像力が育ちます。この想像力が、他者の気持ちを理解する共感性、自分を客観視する力、先の事柄を予想し、計画的、自律的に行動する力、物事の変換を調整する力に発達してきます。

例えば自分が3階の建物から飛び降りた時の痛みを想像してみましょう。私たちはその痛みや衝撃をかなりの実感をもって想像できるはずですが、だから私たちは飛び降りることはしないし、他者に対してそのような行動もとりません。このことは、私たちが実感をもって結果を想像できるからであり、自分で自分の行動を自律的に制御できることを意味します。

これから始まるデジタル化の時代にこそ、実感に基づく想像力である感性という人間の基本的能力を育む幼児期の意義がますます重要になってくると言えます。

5. 令和3年度（2021年度）

主題：這えば立て、立てば歩きの親心

本稿では、大学での私の専門分野である教育心理学の立場から、幼児期の発達の特徴について紹介する。幼児期は、今までできなかったことが目に見えてできるようになっていく時期である。したがってこの時期は、わが子の発達段階の中で保護者にとっては最もほほえましく、楽しい時期だと言える。

幼児期の発達の特徴は、特定の発達段階から次の発達段階へ少しずつできるようになっていくのではなく、突然の変化として現れる点にある。この現象を周囲が見ると、「できなかったことが突然できるようになった」ように見えてしまう。この現象を、以前紹介したようにカタストロフィー現象と呼ぶ。この現象は、突然できるようになるのではなく、今まで蓄積されていた諸能力が幼児期

になって発現してくることが要因である。したがって幼児期の特徴を一言で表現すると「ためて、ためて、一気に出てくる」という内容になる。

こうした特徴を踏まえ、保護者として気をつけておかねばならない点を紹介する。できなかったことができるようになると保護者としても嬉しい。そこでついつい、次から次へと上のレベルをわが子に要求してしまいがちになる。例えば「跳び箱の3段を跳べるようになったから、次は4段を目指そう」といった感覚である。保護者からこうした要求をされると、子としてはかなり苦しい。注意すべき点は「できるようになったこと」と「いつでも、どこでも何度でも、完全にできるようになること」とは異なるということである。

新しいことができるようになったら、今度は「いつでも、どこでも何度でも、完全にできるようになる」ための段階がある。これを熟達化の段階と呼ぶ。熟達化の段階は、特定の技能を完全に習得する時期であり、次の段階へ進むエネルギーをためていく段階でもある。したがって「できたり、できなかったり」の段階になる。その結果「昨日はできていたことが、今日はできない」といった現象が頻繁に生じる。

「這えば立て、立てば歩けの親心」という言葉がある。この言葉はこの時期の保護者の心をよく表現している。そこで保護者としてはこの言葉のような心境に陥りがちであることを自覚として、わが子が少しばかりできるようになったからといって、あまり性急に次を求めすぎないことだ。あまり性急に次を求めすぎると、次へ進むために蓄積すべきエネルギーを根こそぎ奪い取ってしまうことになる。「ためて、ためて、一気に出てくる」のが幼児期である。「ためる時期」を設けることが必要である。

6. 令和4年度(2022年度)

主題：小学校に向けて

本稿では大学での私の専門分野である教育心理学の立場から、小学校教育への円滑な接続に向けた内容について述べてみます。小学校教育への円滑な接続は文部科学省で推進しているテーマになります。具体的には、以下の諸点ができるようになることを念頭に置いてください。

第一に、挨拶ができるようになることです。小学校では挨拶運動を重視しています。挨拶をする時には、声を出して、しっかりした挨拶ができるように練習をしていただく必要があります。

第二に、けじめをつける練習が必要です。小学校では、授業、給食、休み時間、といったように時間の区切りが多くなります。時間のけじめや行動のけじめができるようになるための練習が必要です。

第三に、言葉遣いの練習です。近年、小学校では児童の言葉遣いが深刻な問題になっています。例えばトイレに行きたい時は「先生、トイレ」ではなく「先生、トイレに行ってもいいですか」と言えるように練習しましょう。また友達に対して向けてはいけぬ言葉も学習しておいてください。

第四に、小学校に入るとルールが増えます。ルールを理解して、守ることができるような練習が

必要です。ルールは皆が気持ちよく生活するために必要なきまりです。ルールの必要性を学習しておく必要があります。

第五に、相手の気持ちを考える練習をしましょう。自分が友達から言われて嫌なことは、友達にも言わない練習をしておく必要があります。小学校では友達関係のトラブルが頻出します。

最後に、家庭と学校での子どもの存在意義の違いを保護者が理解しておく必要があります。家庭では、わが子はかけがえのない存在です。しかし学校では集団の中のメンバーの一人です。当然、児童の存在の意味は家庭と学校とでは異なります。したがって「学校でも家庭と同じようにわが子を扱え」といった要望に応じることは学校では困難です。

児童の存在の意味が異なるのは、家庭と学校とでは身に付く心の機能が異なるからです。家庭では愛してもらうことによって自己肯定感が育まれます。一方、学校では集団の中で揉まれることによって、人間関係をこなす力、思い通りにいかない状況に耐える力、秩序を守る力が養われます。以上の点をご理解いただければと思います。

V. 附属幼稚園文集「ぶらんこ」原稿

1. 平成30年（2018年）5月22日

主題：読み聞かせ

いよいよ新しい季節が始まりました。今年度も教職員一同、精一杯務めてまいります。

ところで大学での私の専門分野は教育心理学です。そこで本稿では、心理学の立場から「読み聞かせ」の意味について考えてみたいと思います。

保護者の皆さんは、子どもさんに「読み聞かせ」をされた経験をお持ちだと思います。「読み聞かせ」は幼児の心の成長にどんな効果があるのでしょうか。

「読み聞かせ」は単に文字を覚えさせるための活動ではありません。「読み聞かせ」には想像力を養うという大切な意味があります。想像力は、共感性や予測する力、計画する力、自分を客観視する力といった人間の心の機能の土台になる重要な力です。

そこでまずテレビと「読み聞かせ」を比べてみましょう。何が違うのでしょうか。情報量が違うのです。映像は情報過多なのです。したがって映像の場合、自分で想像力を使う機会がありません。使う機会がないのであれば想像力は育ちません。一般に心の機能は使ってはじめて育ちます。

一方で本の場合は、絵本であっても情報量は映像よりもかなり少なくなります。すると不足する情報は想像力を使って自分で補う必要がでてきます。本の中に「歩いて行きました」と書いてあれば、絵本の中では静止している人物が歩く姿を子どもは想像します。

また保護者の皆さんの中には、お子様から同じ本を何度も読んでほしいとせがまれた経験をおもちの方もいらっしゃると思います。「同じ本を何度も読んでおもしろいのかな」と思われるかもしれませんが。同じ本を何度も読んでもらいながら子どもは先の展開を想像しているのです。「次はこうなるぞ」「やっぱりそうだった!」と想像しているのです。ここでも想像力を使っています。

このように「読み聞かせ」によって想像力を使う経験が、豊かな心の機能の育ちにつながります。

2. 令和元年 (2019年) 5月27日

主題：叱り方・叱ることの意味

今回も私の専門分野である心理学の立場から、幼児期と児童期の心の育ちについての話をいたします。今回のテーマは叱り方です。

叱られた時の子どもの反応を罰反応性と呼びます。罰反応性には二種類あります。一つ目は罰反応性が低いタイプの子です。このタイプは、平気、懲りない、あつかましい性格です。二つ目は罰反応性が高いタイプの子です。このタイプは、まじめ、小心、慎重な性格です。叱る時は、どちらのタイプかによって叱り方を変えましょう。

罰反応性が低い子には、一貫性のある信賞必罰の方法が有効です。躰ける項目は焦点を絞り、例外を許さない指導が必要です。このタイプが思春期に入って非行傾向を示すと、指導が大変になります。

罰反応性が高い子は、躰がしやすく、定着しやすいという特徴があります。一方で、叱られると委縮し、自分の感情を抑圧する傾向が生じます。したがってこのタイプには、許容的な勇気づけが必要になります。子どものタイプを考慮に入れて叱ることが大切です。

次に叱る時の注意点です。親が逆上して怒鳴りつけたりすると、次のような問題が生じます。第一に、子に叱られた理由が伝わりにくくなります。第二に、どうすればよかったのかが子に伝わりにくくなります。第三に、同じような場面に遭遇した時に、子が委縮してしまい、積極的に行動できなくなります。第四に、自発的に判断し、行動する力が身に付きにくくなります。自分で考える習慣が育ちにくくなります。

叱る時に常に親が自覚しておくことは「子の今だけを見ない」ということです。「最終的にどんな人間になってほしいのか」という長期的視野をもっておくことが大切です。そして子が叱られる経験をとおして何を学んでいるのか、という視点を意識しておく必要があります。

3. 令和2年 (2020年) 1月30日

主題：学校の規則にはどんな意味があるのか

ご卒園、誠にありがとうございます。今日まで本園へのご理解とご協力に心から感謝申し上げます。さて、お子様はこれから小学校に入学し、本格的な学校生活が始まります。学校生活の特徴の一つに規則があることが挙げられます。そこでここでは、規則が心の成長にもっている役割について話をいたします。

第一に規則には行動を育てる役割があります。規則は行動を制限するイメージがあるかもしれませんが、実は逆で、規則に沿った行動をとることで、その行動をとることができるようになります。

第二に規則は自律の力を育てる役割があります。児童期は規則によって他者から律してもらう他

律の時代です。この他律の時代に児童は、自分で自分に枠をはめるという力を身に付けます。自分で自分に枠をはめる力が自律の力になります。学校で規則という他律の時代を経験してこそはじめて自律の心が育ちます。哲学者のヘーゲルの有名な言葉に「自由は無条件で得ることはできない。自由を得るためには一定期間、不自由を経験しなければならない」というものがあります。この言葉は、他律の中から自律の心が育っていく過程を示しています。

このようにお子様がこれから学校で経験する規則には、心の発達と成長にとって重要な意味があります。規則の意味は学校だけではなく家庭でも同じです。

4. 令和2年（2020年）5月28日

主題：肌で感じる力

新型コロナウイルスの影響で始まった新しい生活様式のもと、教育の世界はオンライン授業やデジタル配信型の教育機会が増えていく傾向にあるようです。

こうした傾向が進む中、大切にしてほしい人間の能力があります。それは「肌で感じる力」です。「肌で感じる力」とは、皮膚の感覚であり、触ることで感じる触覚です。こうした身体感覚は、私が専門とする心理学の中でも重要なテーマになっています。

肌の面積は広いので皮膚は環境から多くの情報を受け取ることができます。典型的な例は、暑さ、寒さです。暑さ、寒さは肌で感じます。対象は同じでも、見ることによる視覚から得られる情報と触ることによる触覚から得られる情報は異なります。見た姿はきれいな魚でも、触ると鱗は固いし、背びれは鋭くとがっています。音楽の場合でも、音は空気の振動なので、耳ではなく肌で感じる音もあるかと思います。これが演奏や合唱を生で聴く時の迫力だと言えます。

こうした皮膚感覚や触覚といった身体感覚は、人間にとって極めて重要な機能です。そしてこの身体感覚を養う時期が幼児期になります。幼児期の水遊びや泥遊びは皮膚感覚と触覚に働きかける遊びです。幼児期の子は身体を動かしながら身体感覚を身に付けていきます。すると知識や想像力が言葉の意味としてだけでなく、五感に裏付けられた現実感覚を伴った内容になります。

子ども時代に身に付けた手触りや痛みや衝撃を身体感覚として記憶しているため、私たちは他者の痛みをリアルに想像することができるし、危険なものを察知することができます。

今後、私たちの暮らしの中にオンラインやデジタル機器が導入されると、直接感じる機会が減少することが予想されます。そうなった場合、皮膚感覚、触覚、味覚、嗅覚といった身体感覚を使う活動が一層大切になると思われます。

5. 令和3年（2021年）1月13日

主題：不快体験を快体験へ変える力を

幼児教育の場として本園を選んでいただき、心から感謝いたします。今後の成長過程で、ぜひ園児の皆さんに習得してほしい力は不快体験を自分で快体験に変えていく力です。

今後の長い人生で園児は、多くの不快な状況を体験するでしょう。その際に、その不快な状況から逃げることなく自分で行動し、工夫することによって、不快な状況をなくし、快適な状況に変えていく力が必要になります。

この力を習得しないまま成長すると、不快な状況を一方的に拒否するか、逃げてしまうだけになります。例えば人間関係での不快な状況、環境面での不快な状況、感情面での不快な状況など、多くの種類の不快な状況があります。こうした不快な状況は児童期から体験するものです。

これらの不快な体験を自分で快体験に変えていく力を習得するためには、わが子に実際に体験させることが大切です。したがって何でも先回りして親がお膳立てしてあげるのではなく、子どもの水準に合致した適度な負荷を体験させる必要があります。どうしたらよいかをまずは子ども自身に考えさせ、どこから親が援助するのかをよく考えましょう。卒園児のたくましい成長を祈念します。

6. 令和3年(2021年)5月16日

主題：条件付きの愛情，個人差

今回は、私が大学で専門にしている教育心理学の立場から、保護者のあり方についての話をしてみます。

第一の話題は、条件付きの愛情というテーマです。条件付きの愛情とは「あなたが〜である場合に限り、私はあなたを受け入れます」というように、相手に条件を付けた愛し方です。

親からこうした愛し方をされると、子は親に自分の感情や欲求を素直に表出できなくなります。さらに子は親の意向を受け入れながら生きていくことになります。そのため思春期に入ると、こうした生活にもちこたえられなくなります。

なぜなら自分を評価する規準が自分の中ではなく、外部にできてしまうからです。これは自分の意志に基づいて生きることができなくなる状態です。思春期は自分で考え、自分で判断し、結果の責任を自分でとるという発達課題を習得する時期です。そしてこの発達課題を習得することによって始めて、生きているという手ごたえを実感することができます。しかし自分を評価する規準が外部にあるままだと、生きているという確かな手ごたえを感じることはできなくなります。

条件付きの愛され方が続くと、自分を評価する規準がいつまでも親の側にあることになり、子の中に自分自身を評価する規準が育たなくなります。

幼児期から「いい子の自分も悪い子の自分も親がまるごと受け入れてくれる」という安心感を子がもてる必要があります。こうした安心感のなかで自分で自分を評価する規準が育ちます。

第二のテーマは「できる、できない」です。幼児期は個人差が大きな時期です。六歳までの成長曲線には大きな個人差が見られます。

したがって「何歳になったら、何ができるようにならなければならない」というように、成長を杓子定規に捉える必要はありません。一般的な育児情報はあくまで平均的な姿です。子育てに「これが正しい」といった絶対的な規準はありません。子育てはあくまでわが子の実態に照らしながら、

自分やわが子に合っているかを判断しながら進めるのがよいと思われます。

子育てに、あたかも正解があるかのような記事や価値観に踊らされる必要はありません。子育てには当然、個人差や幅が出てきます。「失敗したかな」と思っても、子は子でまともに育っていきます。「できる、できない」に過度に神経質になる必要はありません。

長いスパンで子を捉えることが必要でしょう。

7. 令和4年（2022年）5月15日

主題：五感と身体感覚

ご入園、おめでとうございます。そして附属幼稚園を選んでいただいたことに衷心より感謝申し上げます。

ここで本園の特徴について紹介いたします。第一に、園児の五感と身体感覚に働きかける保育です。近年、小学校では情報機器を使った教育が始まりました。情報機器を使った教育では、直接、人や物と触れ合う機会が乏しくなります。その結果、五感格差が広がる懸念があります。そのため五感と身体感覚を使った体験は、今後ますます重要になります。

第二に、幼児期のみならず、その後の児童期、思春期を見据え、長期的な視野に立った保育です。幼児期は人格形成の土台を築く重要な時期です。そのため、自主性、主体性に加え、集団体験を重視した保育を行います。集団体験の中で園児は、規範意識、コミュニケーションスキルを育みます。

これから、本園の職員一同、お子様の保育に全力で取り組んでいく所存でございます。よろしくお願いたします。

8. 令和5年（2023年）1月30日

主題：行動をとおして心を育てる

園には、運動会やお楽しみ会、卒園式など集団で行動を揃える行事があります。今年度、園では、登園と降園時の挨拶も含めて、集団で行動を揃える取り組みをこれまでより多く行ってきました。こうした取り組みには、行動を通して心を育てるという目的があります。

特定の行動を取ることで、その行動を取るために必要な心の機能が育つのです。特定の行動を取る経験から心が育ちます。特に幼児期から児童期には、行動をとおした心育てが必要です。

集団で行動を揃える経験から育つ心の機能は、第一に自律の機能です。自律の機能は他律の経験から育ちます。集団行動の練習は他律の段階ですが、この経験から自律の機能が育ちます。自分で自分の行動を律する心の機能が育ちます。

第二に、集団で行動を揃える経験から、自分で自分の心を落ち着かせることができるようになります。すなわち自制心が育ちます。

今年度、本園では園児の心育てを目標に、集団で行動を揃える活動を行ってまいりました。

VI. 附属小学校 始業式 (対児童向け)

1. 令和2年(2020年)1月8日 始業式

主題: 続けるということ

おはようございます。今日から後期後半が始まります。そしてこれから新しい一年が始まります。新しい一年が始まるに際し、何かを続けることの意味について話をします。

何かを続けていくということは何かを重ねていくということです。例えば自分にもできそうな小さな我慢を続けていくとしますね。小さな我慢を続けることは小さな我慢を積み重ねていくことになります。小さな我慢を続けて小さな我慢を積み重ねていくと、大きな我慢になりますね。この大きな我慢が我慢する力になります。大きな我慢が強い意志です。

小さな我慢を続け、小さな我慢を積み重ねていくことが大きな我慢に育ちます。積み木を重ねていくイメージです。小さなことを続けていくと、大きくすることができます。これが何かを続けることの意味です。例えば、朝のちょボラの掃除。みんな竹ぼうきの使い方が上手です。これもみなさんが竹ぼうきを使い続けたからです。

最初は、うまく使うことができなかつたかもしれない。不完全な使い方です。不完全でもいいから続けることが大事です。不完全を続けていく。そして不完全を積み重ねていくとだんだん完全になっていきます。小さなことを続けていくと大きくなる。小さな我慢を続けていくと大きな我慢になる。不完全を続けていくと完全になる。これが続けることの意味です。

今年一年、ぜひ何かを続けてみてください。これで校長先生の話が終わります。

2. 令和3年(2021年)4月6日 始業式

主題: 何になりたいか、どんな人になりたいか

おはようございます。今日から新しい年度が始まり、皆さんは新しい学年になりました。特に四月は始まりの季節なので、これからの自分を想像する時期でもあると言えます。

そこで今日は「将来の自分」についての話をしてみます。「将来の自分」を考える時、皆さんは「自分は将来何になりたいか」という将来、自分がやってみたい仕事を想像することが多いと思います。例えば「お医者さんになりたい」とか「学校の先生になりたい」といった将来の仕事を想像することが多いと思います。

ここで「将来の自分」を考える時に「何になりたいか」だけではなく、もう一つ考えてもらいたい将来の姿があります。それは「どんな人になりたいか」ということです。すると「人の気持ちがわかる人になりたい」「人から信頼される人になりたい」といった姿が思い浮かぶと思います。「何になりたいか」だけを考えている時とは違った「将来の自分の姿」を思い浮かべることができます。

「どんな人になりたいか」を考えると、自分がこれから目指すことや身に付けたいことがらがりつきりしてくると思います。

「将来の自分の姿」を考える時には、仕事というところだけではなく、どんな人になるかという

ところを考えると、自分が目指す姿がはっきりしてきますよ。

このように何かを考える時には、一つのところから考えるのではなく、別のところから考えてみると自分の考えがだんだんはっきりとしてきます。今日は「何」と「どんな」を紹介しました。皆さんも「他にどんなところから考えられるかな」を常に意識してみてください。

Ⅶ. 令和2年(2020年)附属小学校指導助言(対職員向け)

1. 1月14日 運営会議

主題：着眼大局・着手小局

仕事を立て込んできます。以前、物事を中心は一つではなく二つあるという楢岡の理論の話をいたしました。これを仕事に当てはめて、第一の中心として「俯瞰的大局的な視点」をもっておくということ、第二の中心として「細かな微視的な視点」で取り組むという話をいたしました。

同じような内容をセイコーウォッチの高橋修司社長が次のような表現を用いて話していましたので紹介します。「着眼大局，着手小局」という言葉です。物事を俯瞰的に捉えながら同時に地道なところから始める，という意味で使っています。

着手小局についてですが，これも以前「雑草という名前の植物がないのと同じように雑用という仕事もない」という話をしました。雑な心で取り組むから雑用になるだけのことです。私も含めて心がけたいと思います。

2. 2月10日 いじめ防止対策委員会

主題：モラル・コンパス

善悪の判断の規準および道徳的判断の規準をモラル・コンパスと呼ぶ。コンパスとは方向を知るための羅針盤であり，道標である。したがってモラル・コンパスとは，自分が進むべき方向を示してくれる道標であり，道徳的判断の拠り所を示してくれる羅針盤なのである。

このモラル・コンパスは，他者から律してもらって他律の時代に身に付ける。したがって他律の時代である学校教育の時代に育成するのがモラル・コンパスである。

ここで重要な点は，人間は自分の中にモラル・コンパスをもっていたとしても，現実にはモラル・コンパスどおりに行動することはできない，ということである。ではなぜモラル・コンパスが必要なのか。自分の現実の行動とモラル・コンパスとのズレを認識するためである。ズレを認識できてはじめて人間は葛藤することができるようになり，良心の呵責に苦しむことができる。ズレを認識できないと，葛藤もなく，良心の呵責に苦しむこともない。これがまずいのである。

学校教育をとおして，自らの中にモラル・コンパスを育て，自分の行動とモラル・コンパスとのズレを認識する力を養いましょう。

3. 3月28日 指導助言用ノートから

主題：自分に合った仕事について 自分の適性に合った仕事

仕事については「自分に合った仕事に就くべきだ」「自分の適性にあった仕事は何か」という意見が見受けられます。自分の適性に合った仕事を適職と呼びます。ここで問題にしたいのは「適職というものが最初から定まっているのか」ということです。

仕事というのは自分で選ぶものではなく「仕事が自分を呼んでいるのだ」と考えることができる。「自分が仕事から呼ばれているのだ」という考えです。天職という言葉がありますが、天職は英語で表現すると「呼ぶ」「呼ばれている」という意味の calling (vocation) です。

「この仕事をやってください」と指示されたり、頼まれたりした仕事は、あなたを呼んでいる仕事だ、と考えることができます。

自分自身は少しも変わらず自分のままでいて、今の自分にぴったり合う理想の仕事との出会いを待ち望んでいる人には、たぶん自分にぴったり合う仕事には永遠に出会わないでしょう。

仕事は、自分が何をもっているのかを自分で発見する過程です。自分にどんな能力があるかは、実際に取り組んでみないと分からない。フランス文学がご専門の内田樹先生も「分かったときにはすでにその道の専門家になっていて、いまさら別の仕事に出会っていただろうと能力が発揮できたのに、といった仮定の話はする気もなくなっている」というお話をされていました。

「自分がもっているものは何だろう、人と違う能力はあるのか」と一人で悩み、落ち込みながら一人で自分と向き合っても出なかった答えを仕事は教えてくれる。頭の中だけで考えて、かたくなになって自分で自分を縛らない方がよいでしょう。そんなふうにして人は、自分に合った仕事を自分で創っていく、自作していくものではないでしょうか。現実を涼しく受け入れましょう。

4. 3月31日 指導助言用ノートから

主題：割り切れる、割り切れない

世の中、割り切れないことが多いですね。仕事でも割り切れないことが多いです。現実には複雑で単純に割り切ることができないですね。

「割り切れなさ」については、フランス文学者の内田樹先生が次のように述べています。「人間にとって白黒はっきり割り切ることができない状態は不快です。白黒はっきり割り切ることができることはとても楽です。しかし「何でも白黒はっきり割り切ろうとする傾向は幼稚なメンタリティです」とのことです。単純に割り切ることができない複雑な状態を単純に割り切らずに複雑なまま抱えることができるのが大人です。物事を単純に割り切ってしまうと、あっちかこっちかの二者択一の思考になるので、言動が極端になります。物事を単純に割り切ってしまうと、自分の主張だけが絶対正しいと思込んでしまいます。物事を単純に割り切ってしまうと、視野が狭くなってしまいます。視野が狭くなると人間は攻撃的になるのです。物事を単純に割り切ってしまうと一部で全体を判断してしまいます。

また、1998年ニューデリーで開催された第26回国際児童図書評議会で、当時の美智子皇后様が、その基調講演のなかで「読書は人生のすべてが決して単純ではないことを教えてくださいました。私たちは複雑さに耐えて生きていかなければならないということ。人と人との関係においても。国と国の関係においても。」というお話をされています。「人生のすべてが単純ではない。複雑さに耐える。」という表現が使われていることからわかるとおり、世の中は単純ではなく、割り切ることができないほど複雑なのです。そして私たちはその複雑さを複雑なまま抱え、耐えていく力が必要なのだと思われまます。

仕事をしていると、割り切れないことも多いですね。しかし、割り切ることができないことを割り切らないまま頑張って抱えていきましょう。

5. 4月24日 指導助言用ノートから

主題：母性と父性の働き

4月21日の職員会議でわが子の愛し方の話をした。その中で代理自我という言葉を紹介しました。その続きで母性と父性の話です。

母性の働きは「包み込む」ことです。しかしこの働きが強すぎると「呑み込む」「抱え込む」働きになります。母親がわが子を呑み込んで、抱え込んでしまっているケースはよくみられます。呑み込んでしまって、抱え込んでしまうと、突き放すことができなくなります。呑み込んでしまって、抱え込んでしまうと、距離がとれなくなります。近づきすぎになるのです。距離をとってはじめてわが子の全体像を把握できます。近づきすぎると一部しか見えなくなります。

先日話した代理自我は呑み込んでしまっている状態であり、抱え込んでしまっている状態です。その結果、共倒れになってしまいます。

父性の機能は、母と子のへその緒を切り離して、外につれだして、外の世界を体験させることです。外の世界とは自分の思い通りにならない世界を経験してもらうことです。自分が中心ではない世界を経験してもらうことです。ルールと秩序を経験させることです。これはわが子が3歳、4歳くらいから経験させましょう。父性の機能は「突き放す、切り離す」ことです。

母性と父性にはポイントが二つあります。一つ目のポイントは、一人の人間の中には母性と父性の両方が備わっていることです。したがって夫婦の場合は、場面に応じて母性の役、父性の役と役割分担をすればよいのです。

二つ目のポイントは、母性と父性がどう育つかということです。放っておいても母性と父性が子のなかに自然と育つのではなく、親子のふれあいの中で、親がもっている母性と父性が親から子へと伝わる（世代伝播）のです。例えば虐待を受けた子は親から母性と父性の機能を受け継ぐ機会が少なくなるので、自分の中に健全な母性と父性の機能が育たないところが問題になります。

6. 6月2日 職員会議

主題：外部の目と内部の目

附属小学校の役割が問われる時代になりました。今日はいかにして附属小学校の役割を捉えるかについて考えてみます。

この点を考えるにあたり、とても売れた本で「深海魚は海を知らない」という本を参考にしてみます。「深海魚が海を知らない」理由は、魚は海に住んでいるけれど、海から出たことがないためです。魚は海の外から海を眺めたことがない。だから自分が住んでいる世界の全体像を客観的に捉えることができないのです。

このことと同じ論理が私たち附属小の職員にも当てはまると考えます。附属小の内部から附属小を捉えるのではなく、外部の立場に立って附属小を捉えてみるのです。この論理は附属小だけではなく、学校教育の役割を考える際にも当てはまります。

社会の中で学校教育が果たす役割、そして学校教育に対する社会の期待は、学校教育の内部の視点からだけでは見えてきません。こうしたことから学校教育の外部の視点から考えてはじめて見えてきます。したがって私たちは、学校教育を捉える視点としては常に外部の視点と内部の視点とをもっていなければなりません。同じように鹿児島県のなかで附属小が果たす役割、附属小に対する鹿児島県の期待は、附属小の外部の視点に立ってはじめて見えてくると言えます。

外部の視点が必要な理由は以下の点にあります。すなわち外部の視点に立つことによって距離をとることができます。距離を取ってはじめて全体像を客観的に捉えることができます。

このように外部の視点から自分達の世界を捉えると、私たちが取り組むべき事柄がおのずと浮かび上がってきます。外部の視点から考える道筋を、学校教育を例に考えてみましょう。学校教育の役割を外部の視点から捉えてみるのです。すなわち経済や産業、社会の動きから学校教育を捉えてみます。

1960年代から1970年代までの高度成長期には、社会は学校に一定の知識水準を持った人材の育成を期待していたと言えます。この時代は同じ製品を大量生産し、大量消費する時代だったからです。同じ製品を大量生産するためには一定の知識水準をもった人間が必要だったのです。学校教育は、こうした社会からの人材育成についての要望を担う必要がありました。すると必然的に社会の中での学校教育の役割が見えてきます。例えば小学校に外国語の教育やICT教育が導入された必然性が見えてくるのです。こうした必然性を理解してはじめて私たち教師が取り組むべきことがらが見えてくるのです。

7. 6月19日 指導助言用ノート

主題：相手意識と自制心

6月の生活努力目標は相手意識。挨拶で相手意識をもつことがテーマになっています。いじめ防止に

も相手意識が必要になります。相手意識をもつことが大切な理由について考えてみましょう。相手意識をもつと何がどうなるのかを考えます。相手意識をもつということは他者の視点を取り入れることにつながります。他者の視点とは、他者の立場や気持ち、他者から見た自分の姿を想像することです。このことによって、何が可能になるのかを考えてみましょう。すなわち、他者の視点もっている機能です。

他者の視点は、自己中心的な自分の感情の暴走を食い止めてくれます。他者の視点をもつことで、自分の感情の暴走を自分でコントロールし、食い止めることができるのです。このことは、他者の視点が、自分で自分を制する自制心を育ててくれることを意味します。まとめますと「挨拶から相手意識が育ち、相手意識から他者の視点が生まれ、他者の視点から自制心が育つ」という道筋になります。

8. 10月27日 指導助言用ノート

主題1：摩擦

仕事をしていると摩擦が起きますね。摩擦は周囲と接しながら進んでいるときに、その進行と接触して触れ合って、その進行を妨げるように働く力です。

ここで二つの道をイメージしてみましょう。一つ目は触れるものが何もない、遮るものが何もないなめらかな、すべすべした道です。これは氷の上を歩くイメージです。二つ目は石や岩がゴロゴロしている道です。

この二つの道のどちらが歩きやすいかを考えてみましょう。一つ目の氷の上はすべすべしているので歩きにくいでしょう。二つ目の道はどうでしょうか。石や岩は進行を遮るイメージがあるかもしれませんが、しかし、目の前にある石や岩は辿り着くための目標になるという機能があります。そして辿り着いたら、今度はその石や岩を足場にして前に進むことができます。

このように考えてみると、目の前にある石や岩は行く手を阻むものではなく、踏み台であり、前進するための支えになってくれるものと言えます。前に進むきっかけをつくってくれると言えます。

周囲と摩擦が起きるのは私たちが前に進んでいる証です。ここでこの摩擦を石や岩のイメージで捉えてみましょう。前に進んでいけば必然的に周囲と触れ合うことになり、摩擦は起きることが当然なのだと思えることができます。すると摩擦は決して負の側面ばかりではなく、私たちが自分の立ち位置を捉え、私たちの前進を押し進めてくれる役割があることがわかります。

主題2：感情のコントロール

感情のコントロールについて考えてみましょう。感情のコントロールが効かなくなり、「キレて」しまうとはどんな状態かを考えてみます。まず感情から行動への道筋を考えてみましょう。通常は感情と行動の間には言葉が介在します。すなわち「感情 ⇒ 自分の感情を表す言葉 ⇒ 行動」という道筋になるのです。真中の「自分の感情を表す言葉」によって感情の意味を自分で理解する

のです。そのうえでその意味に沿った行動に移ります。ここで真中の「自分の感情を表す言葉」が欠落するとどうなるかを考えてみましょう。感情が言葉を介在しないまま行動に移ってしまいます。この状態は自分の感情の意味がわからないまま行動に出ているということになります。これは単に興奮しているだけだと言えます。これがいわゆる「キレた状態」になります。

感情を言葉で表すことで自分の感情の意味を理解できるようになります。感情の意味が理解できればコントロールしやすくなるのです。したがってまず自分の感情を言葉で表現してみるとよいでしょう。例えば怒っているとき、自分の感情を言葉で表現してみましょう。「イラッとしている、少し怒っている、すごく怒っている」。「なぜ怒っているのだろう」。言葉にしてみると自分で自分の状態がわかるのです。すると自分で自分を客観視することができます。自分を客観視することで自分をコントロールすることができるようになります。

今の自分の感情を言葉で表現する習慣を身に付けておくとよいでしょう。

引用文献

イマヌエル・カント (1950) 啓蒙とは何か 篠田英雄 (訳) 岩波文庫 岩波書店